マタイによる福音書5章10－12節 「義のために迫害される者」

1A 義のゆえの迫害

1B 逆説的な世の反応

1C 貧しい者から平和を造る者

2C 良い行いのゆえの迫害

2B 信仰者の受ける迫害

1C アベルから使徒たちまで

2C 主ご自身とその言葉

3B 御霊による新生

1C 光への導き

2C 世の憎しみ

3C 肉なる者の反対

2A 迫害を受けた者の喜び

1B 御名のゆえの辱め 使徒 5 章 40 節

1C 罪のゆえの苦しみ

2C 権威に逆らうゆえの苦しみ

3C 良い行いのゆえの苦しみ

2B 天における報い

1C 激しく攻める者たち

2C 一時的な苦楽と永遠の報い

3C 迫害における喜び

1D 仕返しと落胆

2D 悲しむべき迫害と喜ぶべき報い

マタイによる福音書 5 章を開いてください。今日は、5 章 10-12 節を学んでみたいと思います。平日礼拝では、私たちはイエス様の山上の垂訓、山の上における説教を読み始めています。昨年の四月から始めた学びですが、まだここまでしか来ていません！「10 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。11 わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。」

1A 義のゆえの迫害

イエス様が山上の垂訓で語られているのは、天の御国、神の国の中に生きる者の姿勢です。その初めに、八つの幸いな人について宣言されました。

1B　逆説的な世の反応

1C　貧しい者から平和を造る者

初めに、「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」から始まっています。これは、神のすばらしさを知り、その栄光を仰ぎ見て、自分がどうしうもなく罪深く、自分に何も良い物がないのだという衝撃を受け、絶望している姿です。霊的な貧しさ、困窮状態です。真実なへりくだりは、神に出会うことによって与えられます。主ご自身に会った人たちが、死にそうになるほど倒れてしまった人たちもいます。また、ペテロはイエス様の奇跡を見て、「私は罪人です。私から離れてください。」と言いました。そして、心貧しくされた者こそが、天の御国の中に入れるのです。神の国の中に入れます。

そこで、「悲しむ者は幸いです」と続きます。自分の至らなさ、罪深さを知れば、それを悲しみます。自分の罪を悲しみますが、その時に、「慰められるからです。」と慰めを受けるのです。それから、自分の内に謙虚さ、柔和さが生まれます。「柔和な者は幸いです。」とあります。人からとやかく言われても、自分の分を知っているので、それで癇癪を起こしたり、反発したり、復讐したりしないのです。キリスト者は、ただ恵みによって、信仰によって救われた者ですから、自分に対して全く誇ることができません。そういった人々が、世とは違って、多くのものを受け継ぎます。神の国を受け継ぐための、力や位が与えられるということです。

そして第四の幸いにおいて、分岐点が来ます。これまでは自分の内における変化をイエス様は述べておられました。ここからは、自分の外側に向います。「義に飢え渇く者は幸いです」であります。自分には全く正しいところ、義はないと悟ったならば、自分ではなく、自分を超えた存在、唯一、正しい方は神であることを知ります。聖書は徹底的に、神のみが義であることを教えています。誰一人として正しい者はいません。正しく生きたと思われる人であっても、赤裸々にその罪深い姿を明らかにしています。例えば、泥酔で全裸で寝ていたノアなのです。だからこそ、自分の行いではなく、ただ神に拠り頼むことによって、神からの義の中に生きようとするのです。

そうすると、憐れみ深さが自分に与えられます。「あわれみ深い者は幸いです。」とあります。自分に正しさがないことを徹底的に知っているので、他の弱い人を憐れむことができるのです。自分の同じような状況にいれば、同じ罪を犯したかもしれないと思うのです。そして第五の幸い、「心のきよい者は幸いです。」があります。罪を犯す人々が周りにいたとしても、その人たちに対して怒ったり、苦々しくなったりしないように気を付けます。心がいつも神の愛の中にあるかどうか吟味します。そうやっていると、神が何をしておられるか見えてきます。心がいつも、悪いものに汚されないように気を付けることによって、神の御姿を見つめることができるのです。

このように、人を憐れみ、心を清く保っていれば、そこに平和が実現します。第七の幸いは、「平和をつくる者は幸いです。」です。神との平和を持っていて、また人々との間に神の平和を分かち合うことができます。自分自身も、神の平安によって心が守られています。神は平和の神ですから、

そのような人たちは神の子どもと呼ばれるようになります。

2C　良い行いのゆえの迫害

　このようにして、神の国に入る人は柔和で、憐れ深く、平和を求め、また正しさの中で生きます。ところが第八の幸いにおいて、意外な形で世からの反応があることをイエス様は教えられます。「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」世からの反応は迫害なのです。これだけ良いことをしているのであれば、世の問題の解決を与えているような生き方をしているのであれば、世間は敬い、認めてくれるのではないか？と思います。ところが、全く反対の反応が返って来るのです。

　私がキリスト者になって間もない時に、これほどすばらしい真理なのだから、自分の愛する人々はこれを受け入れてくれるだろう。自分がきちんと説明すれば分かってくれるだろう？と、僅かながらですが期待をしていました。ところが、全く違いました。むしろ反発が強くありました。今までにない、恐ろしくなるほどの嫌悪感を表した人もいました。そのような経験から次第に分かってきました。自分の信じていることは、世とは結び付くことはないのだということです。上からの働きかけ、神が何とかされるのでなければ、知り得ることのできない真理なのだということが分かってきました。

2B　信仰者の受ける迫害

1C　アベルから使徒たちまで

　聖書は、神へ信仰を持った人たちが、そうでない人たちから迫害を受ける記述で一杯であります。アダムが罪を犯し、妻と共にエデンの園を出た後からすぐに起こりました。兄息子カインが、弟息子アベルを殺してしまったのです。神に捧げ物をする時に、神はカインの捧げた大地の実りを受け入れず、アベルの捧げた羊を受け入れられました。そのことでアベルを妬み、ついに殺してしまったのです。アベルは、神が、罪のための血を流す犠牲なしには受け入れられないことを知って、その方法で神に近づきました。カインは、土地から出て来るものは呪われたと神が宣言されたのに、自分の育てた作物を神に持って行きました。神の方法で近づき、信仰によって受け入れられたのに対して、自分勝手な方法で神に近づこうとして、自分のしていることが受け入れられなかったのです（ヘブル 11:4 参照）。

　ヨセフは、ヤコブに愛されていたので兄に妬まれて奴隷としてエジプトに売られてしまいました。神によって選ばれたイスラエルの民は、エジプトで奴隷として虐げられました。神が彼らを、アブラハムの子孫ということで祝福しようとすればするほど、それをファラオは妨げようとして、厳しく労役に課しました。そしてダビデは、主君サウルに殺されそうになりました。彼に主が共におられ、神がダビデを王にすべく選んでおられたので、サウルは妬んだのです。

　そしてイスラエルの国が二つに分裂し、それぞれの王が悪に傾くと、主は預言者たちを遣わしました。主に立ち返りなさいと説いた預言者たちは、迫害されました。エリヤが、アハブの妻イゼベル

から脅しを受けたことを思い出してください。そしてイザヤは、おそらくは晩年、マナセによってのこぎりで切られたという言い伝えがあります。エレミヤは、迫害の連続でした。バビロンが攻めて来るけれども、それはあなたがたが神から離れて偶像に仕えているからだということです。それで彼は、穴の中に入れられて、そこにぬかるみの中で死にかけました。ダニエルも、苦しみを通りました。メディアの王の像を拝まずに、エルサレムに向って主に祈りを捧げたために、獅子の穴に投げ込まれたのです。主が救ってくださいました。ユダの王ヨアシュに対して、祭司ゼカリアが預言をして、主に背くことがないように促したのですが、なんと、彼を神殿の庭で、石で打ち殺したのです（Ⅱ歴代 24:21）。イエス様は、ご自身を殺そうとしていたユダヤ人指導者たちに対して、「カインの時からゼカリアの血まで、地上に流される正しい人の血が、おまえたちに降りかかるようになる」と言われました（マタ 23:35）。

そして、新約聖書においても、使徒たちが迫害を受けていきます。その中で最も代表的なのはステパノです。彼が説教をしましたが、「あなたがたの先祖たちが迫害しなかった預言者がだれかいたでしょうか？（使徒 7:52）」と言いました。それを聞いた者たちは、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ぎしりして、彼に石を投げつけて殺してしまったのです。その迫害者の一人であったパウロが、後に悔い改めて福音を宣べ伝える者となりました。そして今度はパウロが、迫害を受ける者となって行きました。十二使徒の中で殉教しなかったのはヨハネのみと言われていますが、そのヨハネも煮えたぎった油の入っている窯に入れられたという言い伝えがあります。

そして、教会史は迫害を受ける歴史でもありました。キリスト教が公認される前のローマのキリスト者は、生きたまま野外劇場でライオンに食われ、十字架に付けられ、火を付けられ、言語に絶する迫害を受けても、なおのこと信仰を保ちました。黙示録 2-3 章にある七つの教会を読めば、ほとんどの教会が迫害の下にあることを認めることができます。そして日本でも、かつてキリシタンに対する大迫害があり、今現在も迫害は続いています。北朝鮮はキリスト者を強制収容所に入れら得ており、中国では大規模な弾圧が教会に対して行われています。

2C 主ご自身とその言葉

どうして、迫害を受けるのか？それは何よりも、自分の信じるイエスご自身が迫害を受けたからです。主であるこの方が迫害を受けるのであれば、この方にならってついて行く者も迫害を受けるということです。イエス様がエルサレムに行かれる時は、かなり気を付けて動いておられるのを福音書の中で見ることができます。それはイエス様を殺そうと思っている宗教指導者たちがいたからです。そして、ガリラヤ地方でもそこを避ける時がありました。それはそこの領主であるヘロデ・アンティパスがイエス様を殺そうと思ったからです。そして、時が来て、イエス様は自ら彼らの迫害を甘んじて受けて、彼らの裁判で死刑に定められ、ローマの手に渡されて十字架刑の処せられたのでした。

イエス様はこう語られています、「ヨハ 15:18-20 世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも

先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。しもべは主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたも迫害します。彼らがわたしのことばを守ったのであれば、あなたがたのことばも守ります。」

3B 御霊による新生

こういったことで、義のために迫害されるということがあります。私たちの生活では、物理的な迫害を受けることは少ないかもしれません。けれども、実体とは違うことで誹りを受けることはあります。私たちが新しい礼拝の場所を探すのに、いろいろな物件を探しましたが、教会だというとお断りされてきました。キリスト教会は、何か反社会的なカルト団体であるかのようにみなされていることが、よく分かります。また、仏式の葬儀で焼香を焚いたり、遺影の前で礼をしなかったりして、死者を拝まないので、家族からなじられることはしばしばです。また、職場で人々の悪口に自分は加わらないので、それで陰湿ないじめを受けることもあるでしょう。

1C 光への導き

ここでとても大事なことがあります。それは、イエス様がヨハネ 15 章で語られたように、この迫害は私たち自身に向けられたものではないということです。むしろ、私たちが神の御霊によって新しく生まれると、次のことが起こります。私たちがただ居るということ、キリスト者として生きることによって、自分たちが聖なる神に取り組まなければいけなくなるからです。「ヨハ 3:19-21 そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。しかし、真理を行う者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る。」

自分の信仰の状態がどうであろうと、イエス様に救われた者は、そこに主がおられます。そしてその人を通して、主は周りの人に「わたしは、罪人を救うのだ」というメッセージを言葉で言い表さなかったとしても、送っています。主がその人に語られるのです。ですから、ここで、自分自身がその人に何をしたか、しなかったかということは大事ではなく、その人が神に顔を向けなければいけない、横の関係ではなく、縦の関係の中に入りなさいという呼びかけを受けるのです。ゆえに、その呼びかけを断る人は、断るために、拒むために、キリストに属する者とされた者たちを拒みます。こうやって迫害が始まるのです。

2C 世の憎しみ

迫害をするのは、その人が神を知らないからだとイエス様は言われます。「ヨハ 16:2-3 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。実際、あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。彼らがそういうことを行うのは、父もわたしも知らないからです。」会堂にいる

人々ですから、聖書をよく知っているはずです。けれども、聖書などの知識があるからといって、神を知っているとは限りません。ヨハネ 5 章 39-40 節には、聖書を調べているけれども、彼らが、いのちを得るためにわたしのところに来ない、と言われている箇所があります。知識はあっても、神を人格的に知らないというのが、大きな問題です。そのために、神によって、御霊によって生まれた者を迫害するのです。

3C 肉なる者の反対

そして、しばしばそのような迫害を恐れて、世に迎合して、それで真に信じる者たちを迫害することもあります。これまでの迫害の歴史を見ると、キリスト教に全く関係のない人々ではなく、むしろキリスト教関係者であったり、関わっている人々が反対したり、嫌がらせをしたりする急先鋒であったりします。「ガラ 4:28-29 兄弟たち、あなたがたはイサクのように約束の子どもです。けれども、あのとき、肉によって生まれた者が、御霊によって生まれた者を迫害したように、今もそのとおりになっています。」イシュマエルが、イサクをからかいましたが、それは彼が肉に属しているからであり、イサクが神の約束によって生まれてきた者だからです。

イエス様が生まれたベツレヘムで興味深い話を聞きました。ベツレヘムは今でこそ、ムスリムが多くなっていますが、元々はアラブ人のキリスト教徒の町です。そこを訪問した時に、パレスチナ・アラブ人のガイドさんでしたが、彼は御霊によって新しく生まれた、福音を信じる兄弟でした。彼によると、ムスリムの人たちとは仲良くやっているのだそうです。自分を迫害するのは、実は、ギリシャ正教の家族や親族なのだそうです。どうしてか？というと、他の人たちは伝統やしきたりを守っているだけなのに対して、本気でイエス様を信じたからです。そんなことは信じられない、彼のことが理解できないということになって、それで彼に圧力をかけてくるのです。

2A 迫害を受けた者の喜び

1B 御名のゆえの辱め

けれども、イエス様は、「喜びなさい。大いに喜びなさい。」と言われます。なぜ、迫害を受けることを喜べるのでしょうか？迫害自体を喜びなさいということでは、もちろんありません。そんなの、喜べるはずはなく、悲しむべきことで、心痛むことです。けれども、迫害をイエス様に付いて行っているから受けている、ということであれば、それは光栄に値することです。迫害を受けていたら、自分が神から見捨てられているではなく、その反対です。自分自身が主にしがみついているから、主が受ける反対を自分も受けるようになったということを、証ししているのです。使徒たちが、鞭打ちを受けて喜んでいる場面があります。「使 5:40-41 使徒たちを呼び入れて、むちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと命じたうえで、釈放した。使徒たちは、御名のために辱められるに値する者とされたことを喜びながら、最高法院から出て行った。」御名のために辱められるに値する者とされた、と言っているんですね。

1C　罪のゆえの苦しみ

私たちは、迫害について気を付けなければいけないことがあります。イエス様は飽くまでも、「義のために迫害されている」と言われました。その他の理由ではなく、あくまでも義のためなのです。ところが私たちは、周囲の人から冷たくあしらわれたり、見下されたり、批判された時にそれを即、迫害だと言ってしまうことがあります。負け犬根性と言いますか、弱虫の泣きごとと言いますか、被害者意識によるものは、迫害とは言えません。

ペテロが、迫害下にいるキリスト者たちに対して第一の手紙を書きました。そこで彼が繰り返しているのは、「罪を犯したために、苦しみを受けることがないようにしなさい」ということでした。「Ｉペテ 4:15-16 あなたがたのうちのだれも、人殺し、盗人、危害を加える者、他人のことに干渉する者として、苦しみにあうことがないようにしなさい。しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、恥じることはありません。かえって、このことのゆえに神をあがめなさい。」あまりにも熱心になって、相手の睡眠時間に電話をかけて、「あなたは罪人です。悔い改めて、救われなさい。」と言ったとします。それで、その人はひどく怒ります。その時に「迫害された」のではないのです。他人のことを省みることなく、自分のことしか考えないでいたら、それは他人に干渉することで、自分が悔い改めなければいけないことです。

2C　権威に逆らうゆえの苦しみ

そして、イエス様が義のために迫害を受けると言われた、その義は、あくまでも神の義であり、福音にある神の義です。その他のことでも、迫害という言葉や弾圧という言葉を使います。例えば自分の政府に対して反政府運動をして、けれどもキリスト者として反対します！とか、取ってつけたようなことをしてそれで捕まえられても、それは政治的弾圧かもしれませんが、福音によって捕らえられたのではありません。

ペテロは第一の手紙で、そこのところを丁寧に説明しています。「Ｉペテ 2:13-14 人が立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、あるいは、悪を行う者を罰して善を行う者をほめるために、王から遣わされた総督であっても、従いなさい。」ローマ社会には、数多くの不正がありました。皇帝自身が不正を働いていたこともありました。ですから、世直し運動を起こしても不思議ではありません。貧しい人のために立ち上がろう。皇帝は悪人だから政府に対して立ち上がろう！ということもできたのかもしれません。けれども、キリスト教がそのようなものであったら、徹底弾圧を受けて滅んでいたことでしょう。イエス様が、ローマに対して敵対的でなかったことを思い出してください。むしろ、敬って従っていました。そうすることによって、かえって、ローマに強い影響をもたらすことができ、ついに公認にまで至らせたのです。

3C　良い行いのゆえの苦しみ

私たちが迫害されるのは、飽くまでも福音のゆえ、キリストにあって良い行いをしているからこそ、迫害を受けるべきです。ペテロが話しました、「Ｉペテ 2:12 異邦人の中にあって立派にふるまい

なさい。そうすれば、彼らがあなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたの立派な行いを目にして、神の訪れの日に神をあがめるようになります。」思い出す話があります。東アジア青年キリスト者大会で、元脱北者のクリスチャンが話しました。彼女は、中国で朝鮮族の人のところで雇われていました。そこに韓国から来たクリスチャンも雇われていました。かなり酷い仕打ちを受けていたそうです。けれども、彼女はその雇い主のために陰で祈っていたそうです。その姿に彼女は心打たれました。北朝鮮では無神論教育を受けていますから、神などというのは迷信だと思っていました。けれども、そのクリスチャンの姿を見て、神は生きているかもしれないと思ったのです。それで、後にクリスチャンになりました。

2B 天における報い

1C 激しく攻める者たち

ここで、イエス様は天の御国について語っておられます。これは、神の国、神が支配している領域の話なのですが、迫害を受ける時に起こっていることを知らないといけません。「マタ 11:12 バプテスマのヨハネの日から今に至るまで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。」イエス様が来られることによって、そこに神の支配が広がります。イエス様に従う人々によって、そことその周りに神の世界が、神の国が広がるのです。けれども、そこは元々、悪魔の支配の中にある、世そのものであります。「Ⅰヨハ 5:19 世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちはよく知っています。」ですから、神の国が激しく攻め入っているから、相手も反対に抵抗して、攻撃をしているのです。つまり、迫害を受けているのは、私たちが敗北している徴ではなく、むしろ前進し、勝利している徴なのです。しばしば、迫害というものを悪い兆しとして取る傾向があります。もちろん、迫害は悲しいものです。辛いものです。けれども、今まで敵が完全に掌握しているところに、神の国に付く者たちが置かれていて、それで恐れによって攻撃しているのだということを知ってください。私たちは、苦しみを受けている兄弟姉妹のために祈ることによって、援護射撃をします。

2C 一時的な苦楽と永遠の報い

イエス様は、「天においてあなたがたの報いは大きいのですから。」と言われましたね。世においては、無駄骨を折っているように見えるかもしれません。いや、もっと状況が悪くなっているかもしれません。けれども、私たちは確実に、天においては宝が積まれている、報いがあることです。モーセの信仰を思い出すとよいでしょう。彼はエジプトで、ファラオの養子として生きることができました。けれども、主に命じられてイスラエルの民と一つになって生きることを選びました。ですから、彼は苦しみを受けましたが、永遠の報いを信じていたのです。ヘブル 11 章にこう書いています、「11:25-26 はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。」天秤にかければ、僅かな苦しみです。それと引き換えに、永遠の重みのある報いです。今の艱難は軽く、永遠の栄光は思いことを、パウロは他の箇所で話しています。

3C 迫害における喜び

1D 仕返しと落胆

ですから、私たちは迫害を受けることについて、いろいろな否定的な感情に陥らないように気を付けるべきですね。一つは、仕返しです。こんなことをされたのだから、仕返しをしてやろうという思いです。国が迫害をしても、社会が迫害をしても、決して敵視してはいけません。むしろ、愛して、祝福して、この国は主に拠って祝福されているのだと宣言しないといけないでしょう。パウロは言いました、「12:19-21 愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。「復讐はわたしのもの。わたしが報復する。」主はそう言われます。次のようにも書かれています。「もしあなたの敵が飢えているなら食べさせ、渇いているなら飲ませよ。なぜなら、こうしてあなたは彼の頭上に燃える炭火を積むことになるからだ。」悪に負けてはいけません。むしろ、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」

もう一つは、落胆との戦いです。どんなにやっても反対ばかり受ける・・と意気消沈してしまいます。神はもうここを見捨てられたのか、とも思います。けれども、そこでいつも、これは光栄なことなのだと思い出す必要があります。キリストの十字架がどれほど卑しいものだったでしょうか？けれども、神はそれを栄光としてみなしておられたのです。（ヨハネ 12:28）パウロはそれゆえに、自分がローマで囚人となっていることついて、エペソにいる信徒たちにこう言って励ましました。「3:13 ですから、私があなたがたのために苦難にあっていることで、落胆することのないようにお願いします。私が受けている苦難は、あなたがたの栄光なのです。」

2D 悲しむべき迫害と喜ぶべき報い

迫害はそれ自体は悲しむべきことです。これは全ての苦しみに言えますが、キリスト者は苦しみそのものを喜びなさいと言っているのではありません。それは悲しむべきことです。実に悲しいです。けれども、そこには意味があるのだ、神の御心があるのだと知ることによって、信仰によって喜ぶことができることを、神は教えておられるのです。「Ⅰペテ 1:6-8 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。今しばらくの間、様々な試練の中で悲しまなければならないのですが、試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れるとき、称賛と栄光と誉れをもたらします。あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。」